

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00596

研究課題名（和文）日本語複文と文連鎖に関する意味論・語用論的研究

研究課題名（英文）Semantic and Pragmatic Studies on Japanese Compound Sentences and Sentence Chains

研究代表者

橋本 修（Hashimoto, Osamu）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：30250997

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：当該の課題において、概ね計画していた領域それぞれに新しい知見を得ることができた。本研究は大きくは複文・単文連鎖の構成要素となる、それぞれの言語ブロックについての基礎的な性質を解明すること、それぞれのカテゴリにおける複文・単文連鎖を比較し互換可能性などの振る舞いを明らかにすること、これら複文・単文連鎖にかかわる文法事項の習得・運用について解明することの3つを大きな目的としていたが、第1点については特に複文テンス、および引用節の振る舞いについて、第2点については特に原因理由節と対応する単文連鎖との関連について、第3点については接続詞の遠隔共起の習得について、オリジナルな知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文章、ディスコースの構成原理は、文の内部構造の構成原理より解明が遅れているが、本研究によって解明すべき文章、ディスコースの構成原理のうち、「潜在的に多数並んでいる命題群のうち、どこを単文とし、どこをつなげて複文として産出する（できる）のかについて、部分的ながら明確な知見を得たことが学術的意義として重要である。

また、習得研究の側面としては、接続詞の遠隔共起について、そのメタ認知、メタ認知の表出と運用能力がトレーニングによってどうか可能であること、語彙は少ないものの、特定語彙の遠隔共起にとってトレーニングの適正時期を明らかにしたことが学術的・社会的意義として重要である。

研究成果の概要（英文）：In this project, we were able to gain new knowledge in each of the areas we had planned. The three main objectives of this study were to elucidate the basic properties of the language blocks that constitute compound and monosentence chains, to compare compound and monosentence chains in each category and clarify their behavior, such as interchangeability, and to clarify the acquisition and use of grammatical items related to these compound and monosentence chains. The first point is particularly about the behavior of compound sentences and quoted clauses, the second point is particularly about the relationship between cause and effect clauses and the corresponding monosentence chains, and the third point is about the acquisition of the remote co-occurrence of conjunctions.

研究分野：日本語学

キーワード：ディスコース 複文 従属節 単文連鎖 文の接続 作文教育 接続詞の学習

1. 研究開始当初の背景

現代日本語における、「複数の事態を(従属節を含む)複文で表現するか単文連鎖で表現するか」についての条件分岐について、問題の設定そのものがほとんど意識されておらず、その結果として記述も決定的に不足していた。さらに当然の帰結として、日本語話者が持つ、あるいは日本語学習者が修得する上記に関するルールの習得についての研究もおこなわれていなかった。

2. 研究の目的

上記背景に鑑み、複文と単文連鎖との対応関係、およびその対応関係ルールの習得について、引用節、名詞修飾節、副詞節、接続詞「しかし」「そこで」による連鎖を手がかりとして、複文における基礎的な記述、複文と対応する単文連鎖の対応関係についての記述、遠隔共起接続詞の習得について、記述的、実験的(実践調査)的に明らかにする。

3. 研究の方法

引用節とそれに対応する単文連鎖については、単文連鎖における指示的な副詞「そう」に注目して分析を行う。また発展課題として「...と、そうV」という組み合わせにも言及し、共起する動詞の親和性、コーパスにおける出現頻度等を調査する。

名詞修飾節とそれに対応する単文連鎖については、基礎的な部分の分析に重点を置き、修飾部分のテンス・アスペクトを中心に分析する。テンス・アスペクト研究において、長年意識はされながら具体的には進展の少なかった「視点現象としてのテンス・アスペクト」という観点を掘り下げることが理論的に突きつめる。

副詞節とそれに対応する単文連鎖については「ので/から」に導かれる節を対象とし、いわゆる主節策動文以外にも「原因・理由」とは呼べないタイプの「ので/から」節があるのではないかという予測を検証する。

遠隔共起接続詞の習得研究においては、主として小学 中学生を対象に、「...。しかし...。そこで...。」という、2つの接続詞が高頻度に(文を越えて)遠隔共起する例について、広義習得能力調査、意味機能についてのメタ記述調査をおこなう。

上記のうち、引用節とそれに対応する単文連鎖、名詞修飾節とそれに対応する単文連鎖、副詞節とそれに対応する単文連鎖については、母語話者の内省、コーパスを使用した量的調査、理論的検討が中心となる。遠隔共起接続詞の習得研究においては、教室における20名以上を想定した実践的手法をとり、可能であれば広義の定着テストもおこなう。研究計画上の手順としては当然ながら先行研究の収集検討が前提となる。

4. 研究成果

(1) 引用句と、その対応する単文連鎖のうち、以下の点を明らかにした。

1-1

a 「そんなことは言われたくない」和博はそう意地を張った。

b* 「窓を開けましょう」 - 恵美子はそう立ち上がった。

のペアにおいてaが自然でbが不自然なのは、藤田(2000)の引用第 類(述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す)関係のもの)と引用第 類(述部が引用句の発言思考と共存する動作・状態を表す)関係のもの)という区別で説明できるように見えるが、これだけでは、

c* これより第9回関東代表選考会を行います。そう主催者が宣言した。

の不自然さは、cが第 類であることから、説明できない。この現象については項の抑制という観点から説明されるべきものであり、さらに言えば統語的問題というより、項の充足によって飽和している情報にさらに情報を加えようとすることに対する生きて皆冗長性という問題としてとらえられるべきである。

1-2

「そう」と「そんなふうに」に関し、「そう」と「思う」の組み合わせにおいては心内発話の中身にのみ、「そんなふうに」と「思う」の組み合わせは心内発話のありようのみ焦点を当てるの対し、「そう」と「言う」の組み合わせにおいては発話の中身にも発話のありようにも焦点を当てることができる。

(2) 名詞修飾節については以下の点を明らかにした。

・内容補充の連体修飾節の内容は、発信者の認識が安定している時間の範囲の中の任意の時点で情報データベースの中で参照することのできる情報である。したがって、修飾節のテンスは任意の参照時における発話者の認識を示すものであり、主節時・発話時とは独立している。

・アスペクト解釈にはテンス的把握が含まれており、その意味的な全体像を記述するにはテンス・アスペクト核という概念が必要となる。テンス・アスペクト核をもとにして、文全体のテンス

スが解釈される。テンス解釈とは、テンス・アスペクト核を、当該事態に応じて時間軸上に位置付けることである。すなわち、テンス・アスペクト核を時間軸上の、基準となる時点（以下「基準時」と呼ぶ）よりも前か後に置くことである。ここで基準時に視座が置かれる。基準時と観察開始時点は一致する場合もあるが、一致しない場合もある。事態が基準時よりも後に生じると解釈されるとき、基準時に視座が置かれ、視線は[過去 未来]という方向に向けられる。そこで、この方向に合致するル形述語を持つテンス・アスペクト核が選ばれ、時間軸上に置かれる。逆に基準時よりも前に生じたと解釈されることがらであれば、視線は[未来 過去]という方向になるので、この方向に合致するタ形述語を持つTA核が選ばれて、時間軸上に設定される。こうして、与えられた基準時からみて、時間的に前か、後かが定められる（したがって、当然ながらアスペクト核そのものは基準時を持たない）。

(3) 副詞節とそれに対応する単文連鎖については以下の点を明らかにした。

3-1

「ので」「から」で導かれる節は原因・理由節と呼ばれる。一部「原因・理由を表さないカラ」があるという先行研究があるものの、その言及は主節が策動文である場合の指摘のみである。調査を深めると、原因・理由をあらわさない「ので」「から」節は、主節が策動文でない場合にもある。

a 店員が近くを通りかかったので、太郎は声をかけた。

b ?店員が近くを通りかかった。だから太郎は声をかけた。

c ?太郎が声をかけたのは、店員が近くを通りかかったからだ。

d *太郎が声をかけた理由は、「店員が近くを通りかかったから」だ。

上記aは通常原因・理由を表すとされるが、b,c,dには一定以上の不自然さがあり、裏に条件文を含意すると言われる、典型的な原因・理由文であるとは言えない。時間的に継起しているが、単文連鎖における「だから」の前件後件との関係とは異なっている。

3-2

上記の「ので」「から」節は前件と後件が継起関係にあるが、

e 列車が駅に着くと、たくさんの高校生がおりてきた。

のようなト節による継起文とは質が異なっている。このようなト節の継起においては、前件・後件ともに同一の観察/知覚者を持っているが、当該の「ので」「から」節は、前件を後件の主体、あるいは主体に感情移入した話者が知覚すし、その知覚を受けた反応として表現が成立している、という構造を取る。

(4) 遠隔共起接続詞の習得研究においては以下の点を明らかにした。

4-1

「しかし」と「そこで」の遠隔共起の習得については、平成29・30年告示の小学校・中学校・高等学校の学習指導要領、各種学寮調査等の課題と適合している。特に、令和3年度全国学力・学習状況調査「中学校国語」の課題とは関連が深い。

4-2

「しかし」「そこで」の遠隔共起の習得についてデータ駆動型学習(data-driven learning)の手法をとることは有効である。ただし学習者にどう見せるかという問題についてはかなりの工夫が必要である。今回は当該の「そこで」と、遠隔共起とは関わらない場所の「そこで」を区別させるクイズを用いることで解決を図ったが、その手法の有効性が確かめられた。

4-3

小学校4年生に対する調査において、事後テストにおいて有効な自由記述(当該の文章に対する一定レベル以上のメタ記述)をおこなった生徒グループの正解率が最も高く、偏差も小さいことが明らかになり、メタ記述能力の育成の有用性が示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 橋本修、安部朋世、落合哉人	4. 巻 59
2. 論文標題 「低程度で肯定的な可能性・蓋然性をあらわす副詞「ワンチャン」の発生」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Language and Culture (日本語文化)	6. 最初と最後の頁 7-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島資生	4. 巻 519-11
2. 論文標題 視点現象としての現代日本語のAspect・Tense試論 (続)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hashimo, Osamu・Kikuchi, Sonomi	4. 巻 56
2. 論文標題 Complement Distribution and Complement Factivity of "NO"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Language and Culture (日本語文化)	6. 最初と最後の頁 7-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田里美、田中佑、安部朋世、橋本修、矢澤真人	4. 巻 12
2. 論文標題 高校生、大学生の論理的な文章における語彙運用上の課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明星大学研究紀要 教育学部	6. 最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西垣 知佳, 物井 尚子, 星野 由子, 橋本 修他	4. 巻 21-1
2. 論文標題 児童のメタ言語分析に基づく外国語科と国語科の連携の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JES Journal 小学校英語教育学会誌	6. 最初と最後の頁 176-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20597/jesjournal.21.01_176	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部二郎	4. 巻 60
2. 論文標題 [ト+ソウ+動詞]型の引用表現 「さっさと帰れ」と、そう言った	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学文学	6. 最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部二郎	4. 巻 25
2. 論文標題 「～ト」引用句と副詞的指示表現「ソウ」：複文と文連鎖の比較に関する理論的前提	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 札幌国語研究	6. 最初と最後の頁 10-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本修、安部朋世、菅野倫正	4. 巻 53
2. 論文標題 Multipul Simple Sentences or a Single Complex Sentence?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 韓国日本語文化学会	6. 最初と最後の頁 5-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.17314/jjlc.2020..53.001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部二郎	4. 巻 60
2. 論文標題 [ト+ソウ+動詞]型の引用表現	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 札幌国語研究	6. 最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 永田里美・田中佑・安部朋世・橋本修・矢澤真人
2. 発表標題 論理的文章に対する評価の様相 - 高校生の意見文を対象として -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第142回東京大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本修・安部朋世
2. 発表標題 「ので」「から」の使い分け再考
3. 学会等名 韓国日本語文化学会2023年春季学術大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	阿部 二郎 (Abe Jiro) (50400057)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大島 資生 (Oshima Motoo) (30213705)	東京都立大学・人文科学研究科・教授 (22604)	
研究分担者	安部 朋世 (Abe Tomoyo) (00341967)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関